お奉行さまのランプ

今回取り上げたランプは、約160年前に浜益に赴任していた荘内藩の酒井玄蕃というお奉行さまが使っていたと伝えられるものです。浜益にお奉行さまがいたと聞いて驚くかもしれませんが、お奉行さまも奉行所もあったのです。

当時、幕府はロシアの南下を警戒して荘内藩（現在の山形県）に天塩から浜益にかけての海岸線の警備を命じました。荘内藩は浜益平野を見下ろす川下地区の丘陵地に砦を築き、当時の地名をとって「ハママシケ陣屋」と呼ばれました。

陣屋には200人余りの藩士が暮らし、その中には後に開拓使大判官となった松本十郎が含まれています。奉行所は陣屋の一番高い場所に建てられました。先ほどの酒井奉行もここにいたわけです。残念ながら陣屋は戊辰戦争に伴い藩士が引き揚げたため1868（明治元）年に解体されました。しかし、その跡は幕末の国際情勢をうかがえる価値が高い遺跡として1988（昭和63）年に国の史跡に指定されています。

現在、お奉行さまのランプは市民図書館浜益分館で開催されている「ハママシケ陣屋展」で見ることができます。さて、お奉行さまのランプは、高さ27センチで本体には精巧な唐草文様がつけられています。石油ランプは、当時使われていたあんどんやろうそくに比べ10倍の明るさがあったといいます。このランプは明るさを増すために芯に空気がたくさん流れるように工夫されたタイプです。少し気になるのはこのタイプが作られるのは1887（明治20）年からと言われていることです。お奉行さまが使ったとするとちょうと時代が合わないようで調べてみる必要がありそうです。

「ハママシケ陣屋展」は、陣屋の笹刈りなど手入れをしながら陣屋の勉強をしている荘内藩陣屋研究会の皆さんが企画したものです。これから石狩、厚田、浜益と桜の季節を迎えます。桜の花を追いかけがてら、新しくオープンした厚田の道の駅、さらに浜益へと足を伸ばし、浜益の秘められた歴史を尋ねてはいかがでしょうか。

（工藤義衛）

お奉行さまの石油ランプ

ハママシケ陣屋
大手門

石狩市学芸員
工藤義衛　Tomoe Kudo

専門分野は考古学と風俗史。石狩独特の文化を研究する一環で石狩の食を代表する「石狩鍋」の歴史やルーツについても調査を行う。

問文化財課　いしかり砂丘の風資料館　☎62・3711

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。